生成学が立ち上がった背景

— なぜ、今「生成学」が必要とされるのか —

1. 現代の知の限界

従来の学問は、対象を分けて分析することで多くの知を生み出してきたが、人間の知性・行動・社会・環境が複雑に絡み合う現実を、十分に捉えきれなくなってきた。

・分断された知では、全体の動きや変化を説明しきれない。
・変化の速い現代社会では、固定的な理論では対応が難しい。
・人間・社会・自然を切り離して理解することの限界が明らかになった。

2. 「知性は編み上がる」という生成的な視点

人間の知性は、あらかじめ完成したものではなく、経験・関係・判断・行動の相互作用の中で、絶えず編み上がり、更新されていく動的な構造であるという見方が重要になった。

・知性は固定された能力ではなく、関係の中で生成される。
・経験や状況に応じて構造が変化し、柔軟に再編される。
・この「編み上がる知性」を理論的に捉える枠組みが求められた。

3. 関係性の中で生まれる知の統合

人間の理解・判断・行動は、個人の内面だけでなく、他者・社会・歴史・環境との関係の中で形づくられている。この関係性の中で生まれる知を、統合的に扱う理論が必要となった。

・個人・他者・社会・環境の相互作用を一つの構造として捉える。
・多様な要素が関係し合う中で、新たな意味や行動が生まれる。
・分野横断的な統合の視点が、現実の複雑さを理解するために不可欠となった。

4. 生成学の成立

こうした課題と視点を踏まえ、知性を「編み上がる動的な構造」として捉え、人間の理解・判断・行動を、関係の中で生成し続ける過程として明らかにする理論として、「生成学」が立ち上がった。

5. 生成学が目指すもの

・人間の知性を、固定ではなく生成の過程として理解する。
・個人・他者・社会・環境の関係の中で生まれる知を統合的に捉える。
・変化する現実に応じて、より柔軟で創造的な判断と行動の基盤を明らかにする。

生成学とは

— 知性を「編み上げる過程」として捉える理論 —

1. 概念

生成学とは、人間の知性・判断・行動を、固定された能力や性質としてではなく、
多様な経験・身体・感情・他者・環境との相互作用の中で、絶えず編み上がっていく
「生成の過程」として捉える理論である。

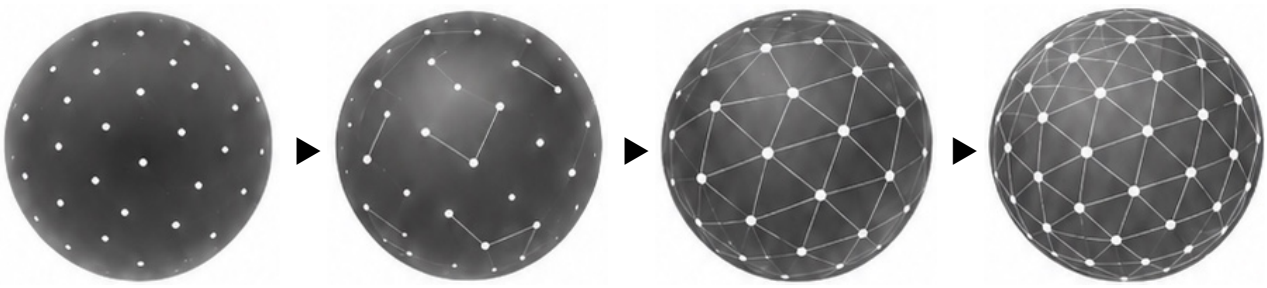
2. 理論的基盤

生成学は、システム論・複雑系科学・認知科学・関係論などの知見を統合し、
知性を「要素の相互作用によって立ち現れる動的な構造」として理解する。

3. 基本的な考え方

・知性は個人の内部に固定されたものではなく、関係の中で生成される。
・経験・感情・判断は相互に影響し合い、時間の中で構造が編み上がっていく。
・知性は点の集合ではなく、つながり（ネットワーク）による動的な構造である。

4. 知性が編み上がる過程（生成過程の図）



① 点の状態

個々の経験や知が、
それぞれの位置に
存在している段階。

② つながりの形成

経験や知が関係し合い、
線としてつながり始める
段階。

③ 編み上がり

複数のつながりが重なり、
全体としての構造が
形づくられる段階。

④ 動的な循環

編み上がった構造が、
新たな経験や関係によって
更新され、再び編み直される。

知性は、このような過程を循環的に繰り返しながら、絶えず編み上がり、生成されていく。

5. 生成学が示す主な認知能力（構造の働き）

具象保持	— 経験・出来事・感覚などの具体的な情報を、文脈の中で保持する。
次元往還	— 時間・立場・関係など、異なる視点や次元を往還し、複数の文脈を結ぶ。
生成的統合	— 複数の要素を関係づけ、状況に応じて新たな意味・判断・行動を生み出す。
自己の非固定	— 自己を固定的な存在とせず、関係や経験に応じて柔軟に更新し続ける。

6. 結論

生成学は、知性を「編み上がる動的な構造」として捉え、
人間の理解・判断・行動を、関係の中で生成し続ける過程として明らかにする理論である。

生成学から考察する
楠木正成公・正行公の知性と行動構造

— 南朝の理念と、二人に見られる生成的な知性 —

1. 研究の視点

生成学の「知性は関係の中で編み上がり、状況に応じて更新される」という理論から、
楠木正成公・正行公の言動・判断・行動を、構造的・生成的に考察する。
個人の資質だけでなく、時代・関係・理念・場の中で生まれた知性の働きとして捉える。

2. 二人に共通する生成的な知性

・関係生成性：朝廷・民・地域との関係の中で、共に生きる戦略を生み出した。
・多層的統合性：軍事・政治・倫理・信仰・民の生活を統合して判断した。
・動的更新性：戦況の変化に応じて、柔軟に構想と行動を更新した。
・自己の非固定性：自己の生存や立場に固執せず、理念と未来のために動いた。

3. 正成公と正行公の考察

	楠木正成公（1294–1336）	楠木正行公（1326–1348）
・時代と立場	後醍醐天皇の倒幕運動に呼応し、 建武政権を支えた。	父の志を継ぎ、南朝の継続と 再起を担った。
・知性の特徴	土地・地形・民の力と政治情勢などを 同時に捉え、戦略を編み上げる 「統合的・構想的知性」。	理念と現実を往還し、困難な状況でも 行動を更新する「継承・展開の知性」。
・主な行動・判断	・地域と民の協働による防衛体制 ・後醍醐天皇との理念的連携 ・湊川での戦いと最期	・四條畷の戦いでの抗戦 ・少数でも理念を保った行動の選択 ・死をも視野に入れた主体的決断
・生成的な意義	南朝の理念を、戦略・組織・民の力 として現実の社会に編み上げた。	その理念を次代へとつなぎ、 関係と価値を再生成した。

4. 考察のまとめ

・正成公は、土地・地形・民の力・軍事・政治情勢・時間的条件を同時に捉え、
それらの関係を編み上げながら戦略を形成した。
・こうした複雑な関係の統合を通して、南朝の理念を「現実の構造」として編み上げた。
・正行公は、その構造を受け継ぎ、状況に応じて再生成しながら、理念の継続を選んだ。
・二人は、固定された英雄像ではなく、関係の中で知性を編み上げ続けた
「生成的な実践者」として理解できる。

5. 結論

楠木正成公・正行公の生き方は、生成学が示す「編み上がる知性」を考察する
一つの歴史的事例であり、個人の経験と時代の関係を統合しながら、
新たな価値と行動を生成し続けた実践として捉えられる。